

1920年代メキシコ先住民の美人コンテストにおけるモダニティ

大村香苗

本稿では、1921年にメキシコで行われた先住民女性を対象とした初の美人コンテスト、「インディア・ボニータ・コンテスト(La India Bonita)」の分析を通し、革命直後の文化復興期にあったメキシコにおける先住民女性の身体「美」や「伝統性」の構築過程とモダニティとの関わりについて考察する。

インディア・ボニータ・コンテストが開催された1920年代のメキシコは、革命勃発の要因となったポルフィリオ・ディアス独裁政権下における欧化主義および白人至上主義に対する批判から、先住民文化にインスピレーションを求めた「メキシコ的なもの(lo mexicano)」の探求が活発化した時期にあたる。インディア・ボニータ・コンテストの開催は、前政権下での急速な近代化および西洋化に対する反動としての先住民文化の復興あるいは過去への回帰に見える。しかしながらそこには、同コンテストに関わった知識人の多くが、欧米のモードに敏感なコスモポリタンであったこと、コンテスト開催に伴い先住民文化の商業化・商標化が起こったことなどメキシコ・モダニティの一形態が示される。

本稿では、同コンテスト関係者が西洋中心主義的美意識に対抗しつつ、先住民女性の「伝統性」をモダニティの文脈へと書き換える様相、さらにその文脈の中でインディア・ボニータがより普遍的メキシコ女性の表象として再創造されていく様相について述べる。